ヒューマン&モンスター

三条 蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒューマン＆ａｍｐ；モンスター

【Ｎコード】
Ｎ４２７０Ｚ

【作者名】
三条　蓮

【あらすじ】
平凡な日常を過ごしてきた高校生、楠原　周。しかし、高校２年の始業式の日、その日常が突然終わりを告げる。

「いつも通り」の朝

午前５時５０分、俺は目が覚めた。
今日は４月７日、金曜日。俺が通う高校の始業式の日だ。
ベッドから体を起こし、高校の制服に着替える。そして、階段を下りてリビングへ向かう。
リビングに入り、テーブルに着く。
「おはよう、周。朝食ならできてるわよ。」
そういって、母さんが俺の前に朝食を運んできた。白米と味噌汁、いつも通りの朝食だ。
俺が朝食を食べていると、父さんがリビングに入ってきた。
「おはよう、父さん」
俺が挨拶すると、
「おはよう、周。母さん、新聞は？」
「はい、これが今日の新聞よ」
母さんはテーブルに置いてあった新聞を父さんに渡した。父さんは朝食をとりながら新聞を読むのが日課だ。
「そういえば、綾はまだ起きてないのか？」
新聞を読んでいた父さんが訊いた。
「あら、また寝坊かしら」
母さんが呆れたように言った。
「それと、周。今日は母さん帰ってこれないわよ。」
「知ってるよ。父さんも姉ちゃんも、今日は帰ってこれないんだろ」
「まあ、新入社員の歓迎会だからな、父さんも母さんも」
父さんが付け加えた。
俺は朝食を食べ終わると、学校へ行く支度をした。
洗面所で歯を磨き、顔を洗い、自室から学校用カバンを取ってくる。出発する前に冷蔵庫から麦茶を取り出し、コップに注いで飲ん

でいると、
「ふあ～ぁ、おはよ…」
ようやく、起きたか。
「綾、もう少し早く起きなさいよ。もう２０でしょ」
母さんがそう言うと、
「大丈夫だって、まだ時間あるし」
綾は悪びれた様子もなく言った。
「そういう問題じゃないでしょ。周だって父さんだってもう起きてるのよ。まったく…」
母さんはまた呆れたように言った。
「それじゃ、行ってくる」
俺は支度を終え、玄関に向かう。後ろから母さんが声をかける。
「行ってらっしゃい。気をつけてね」

いつも通りの日常。
それが今日、突然終わりを告げるとは、このとき全く予想もしなかった。

突然終わった「いつも通り」

愛知県　豊田市。
日本のみならず、世界にもその名を轟かす世界的大企業、トヨタ自動車の企業城下町。
日本全国の市町村別での工業生産額は日本一。人口は約４２万人。名古屋市に次ぐ愛知県第２の都市。
こう聞くと、かなりの都会の様に思えるかもしれない。

…しかし、信じられないかも知れないが、豊田市はかなりの田舎だ。
まず、交通の便が悪い。
名古屋市から鉄道で来ようとすると、必ず乗り換えがいる。しかも、ＪＲが通っていない。その上、電車は全て各駅停車。特急はおろか、急行すら来ない。
次に、夜になると大抵の店が閉まってしまう。豊田市の中心駅、豊田市駅前の百貨店ですら夜７時には閉まってしまう。９時になれば、営業しているのはせいぜい居酒屋くらいだ。
さらに、森林がとても多い。なんせ、市の面積の７割が森林なのだから。市街地から少し離れれば、普通に田畑が広がっている。
この街の田舎っぷりはあげればきりがない。
でも…
俺はそんな豊田市が好きなんだよな。
確かに田舎だけど、個人的には住みやすい街だと思うし。
今、俺は家を出てバスで豊田市駅（通称：市駅）に向かっている。駅から電車に乗って、２駅目で下車、そこから歩いて数分で俺の通う「豊田中央高校」に着く。

そういえば、俺の家族を紹介してなかったっけか。学校に着くまでまだ時間がある。今のうちに紹介するか。

まず、俺の父さん

楠原宗介（くすばる　そうすけ）　４２歳。トヨタ自動車で働く、いわゆるトヨタマンだ。実家は九州にある有名な剣道教室。穏やかな性格だが、剣道四段の腕を持つ。

次に、俺の母さん

楠原由紀（くすばる　ゆき）

４１歳。旅行代理店で働いている。実家は名古屋市にある。名古屋大学を卒業しているので、頭脳明晰。

バスが駅に到着した。ここからは電車に乗る。

さて、家族紹介の続きだ。

次は、俺の姉ちゃん

楠原綾（くすばる　あや）

２０歳。市内のブティックで働いている。結構マイペースだが、怒ると怖い。高校時代は剣道部の主将で、剣道二段。　最後に、俺

楠原周（くすばる　しゅう）

１６歳。高校2年生。無愛想だと人に言われるが、クラスメートからは信頼されているらしい。剣道は姉ちゃんと同じ二段を持っている。

俺たち家族の紹介は以上だ。

俺は電車を降り、歩いて5分の所にある高校へ向かう。

校門をくぐり、昇降口で靴を履き替え、階段を上がり、3階にある「2年1組」に入る。

「あ、楠原君おはよう」

教室に入ってすぐに挨拶したのは、深谷俊哉（ふかや　としや）。

小学校から付き合いがある親友だ。平凡な奴だが、オカルトが大好きで、いろんな妖怪や怪談、悪魔なんかに詳しい。
「おはよう、楠原君」　次に挨拶してきたのは俊哉の隣に座っている髪の長い女子、粕屋友里（かすや　ゆり）。中学のとき、いじめられていたのを助けてやった事がきっかけで、仲良くなった。学年一の秀才で、俺の2倍は頭が良い。
俺は友里の後ろの席に座る。そこが俺の席で、そこから教卓に向かって前斜め左が俊哉の席だ。ちなみに、俺の席の右側には机がない。
「進級しても、全然変わらないね。ま、当然だけど」
俊哉がつぶやく。
この学校に入学すると生徒は、普通科、商業科、工業科の3つに別れることになる。俺たちは普通科に在籍しているが、普通科は1クラスしか無いので、クラス替えが存在しないのだ。
こうして3人でしゃべっているうちに、放送が流れた。始業式を行うから、体育館に集まれ、という内容だった。クラスメート達が教室を出て、体育館に移動している。俺たち3人も、体育館に移動した。

始業式恒例の、校長の長ったらしい話を聞き流し、始業式は担任発表に移っていく。
1年生から順に担任が発表されていく。そして、
「2年1組の担任は、社会科の中条先生です」
という教頭の発表で、クラスメート達は歓声を上げた。
中条は、この学校で最も生徒から信頼されている教師なのだ。教え方も上手く、若いというのも人気の理由だろう。

退屈だった始業式が終わり、教室に戻る。
あれ？
俺の右に机がある。

変だな、朝は机がなかったのに。
ガラガラ、という音と共に扉が開き、中条が入ってくる。
「皆さん、進級おめでとう。今日からは皆さん2年生です。気を引き締めて、頑張ってください。それと、皆さんに重大なお知らせがあります」
そう言うと、中条は一呼吸置いて言った。
「今日、このクラスに転校生が来ます」
クラスがどよめいた。聞いてないぞ、そんな話。
「皆さんには秘密にしてました。サプライズってやつです」
中条の一言で教室が騒がしくなる。「さすが中条先生！」とか「最高だぜ先生！」とかいうヤジも飛ぶ。
「静かに。それでは、入ってきてください」
扉が開き、転校生が入ってきた。
…マジか？
すげー美人だぞ。
長い手足に、長い髪、非の打ち所がないくらい整った顔つき。しかも髪の毛は、青色だぞ。しかも、胸もでかい。D、いやEはあるんじゃないか？
その姿を見て、男子達が歓声をあげる。
中条は黒板に転校生の名前を書き、紹介する。
「転校生の白水沙姫（しろうず　さき）さんです。東京の台東区からこの学校に転校してきました。皆さん、仲良くしてあげて下さいね」
男子たちはハイテンションになって奇声をあげる。
「静かに。それでは白水さん、自己紹介をお願いします」
転校生、白水沙姫は教壇にあがった。
「東京から転校してきました、白水沙姫です。まだ分からないことだらけですが、よろしくお願いします」
うぉぉ、と叫ぶ男子達。いくらなんでもテンション高すぎだろ。
中条は静かにするよう注意するが、静かになる気配はない。

「…静かにしていただけないですかねぇ…」
中条は笑顔を浮かべ、低い声で注意した。その瞬間、教室が静まり返る。
中条は普段穏やかな教師だが、ごく稀に低い声で注意することがある。このとき、顔は笑顔だが、黒いオーラのようなものが出るのだ。しかも、目の色が変わり、人を刺し殺しそうなぐらい鋭くなる。それを見た生徒は恐怖にかられ、動けなくなる。今まさにその状態だ。
数秒の沈黙の後、
「それでは白水さんは、後ろの空いている席に座ってください」
そういう事か。
俺の右の席は転校生の席だったのか。
白水沙姫は俺の隣の席まで歩き、着席する。
「よろしくね、楠原君」
白水沙姫に挨拶された。

その後、諸連絡があり、ホームルームは終わった。
白水沙姫はクラスメート達から質問攻めにされている。男子からは「彼氏いる？」とかいった質問、女子からは「東京だとどんなファッションが流行ってるの？」とか。
俺や俊哉、友里は教室の隅で話をしている。白水沙姫の席が隣だから、うるさくて仕方ないのだ。
「おーっす、周」
背後から声を掛けられ、振り向くと一人の生徒が肩を叩いてきた。
コイツは工業科の海崎龍介（かいざき　りゅうすけ）。隣の組の奴で、俊哉と同じく、小学校から付き合いがある親友だ。
車が大好きで「免許をとったら峠を攻める」と言っている走り屋志望の奴だ。
「そういや訊いたぞ周。あの転校生の隣だってな～。羨ましいよ、あんな美人の隣でさ～」

龍介が心底羨ましそうに言った。
「でもさ…なんか気味が悪くない？」
俊哉が唐突に切り出す。
「どういう事だ？」
俺が尋ねる。
「なんか…あの沙姫って子…普通じゃない気がする」
「そりゃそうだろ～、芸能界でもやってけそうなくらいかわいいからな～」
龍介は白水沙姫にデレデレのようだ。
「そこが普通じゃないんだよ。雰囲気が人間離れしてる気がする。もしかしたら」
「俊哉、きっと思い込みだよ」
俺は俊哉が言いたいことを遮り、否定した。
昔から俊哉は時々こういうことを言うのだ。オカルト話が好きだからか、こういう話に結びつけたがる。で、それは１００％当たらない。
「…そうだよね。考えすぎか」
俊哉、お前はなんでもオカルト話にすることを止めた方が良いぞ。
そんなこと、あり得ないんだから。

学校は半日で終わったが、俺は用事があったので家路に着いたのは夕方になってからだった。
市駅でバスを待つ。
俺の家がある「東豊田ニュータウン」へ向かうバスは３０分に一本。そこまで待ち時間はない。
やがてバスが来て、俺はそれに乗り込み、座席に座る。　バスの発車１分前、一人の乗客が乗ってきた。俺はその乗客を見て、驚いた。
「楠原君？」
その乗客とは、あの転校生、白水沙姫だったのだ。

「東豊田ニュータウン経由、三河豊田駅前行き、発車致しまーす」
運転手のアナウンスが流れ、扉が閉まり、バスが動き出す。
「奇遇だね、楠原君」
白水沙姫ははにかむ。
「楠原君はどこに住んでるの？」
「東豊田ニュータウンっていう団地だよ」
「ふーん」
白水沙姫はそう言うと、
「付いていって良い？」
そう訊いてきた。
俺はこういうとき、どうしたら良いのか分からない。友里とよくつるんでるが、それ以外の女子とは関わりがないだから、こういう状況には滅法弱い。どうしたら良いんだ、俺。
「ま…付いてくるなら付いてくれれば？」
無愛想だと言われる俺だ。こういう時、ついついこう返してしまう。
しかし、
「ありがと」
白水沙姫は気にしていないようだ。

バスで２０分の所に、「東豊田ニュータウン」がある。
俺と白水沙姫はニュータウン内のバス停で下車し、自宅へと向かう。
「大きい団地だね」
白水沙姫がつぶやいた。
この「東豊田ニュータウン」は、東西に広く、迷路のように入り組んでいる。始めてくる人は、道に迷ってしまう人も多い。俺も５歳くらいの頃、団地内で迷子になってしまった経験があるからな。
バス停近くの路地へ入り、歩いて５分。それで俺の家に到着だ。
「ここが楠原君の家か～、ところで家の人は？」

「今日は全員用事で帰ってこれないんだ」
「じゃあ、今日は一緒にいてあげようか？」
「遠慮する。一人でも飯作れるし、家事全般出来るしな」
そう言って俺は制服のポケットから自宅の鍵を取り出す。
「それじゃあ、また明日学校で」
白水沙姫にそう言って、自宅の扉を開ける。そのまま中へ入ろうとした、

チャキッ

何かの音がして、肩を掴まれる。
「動かないで」
後ろから、殺気を孕んだ鋭い声。
俺は振り向いた。
「っ…！」
振り向いた俺が見たのは

俺に、ナイフを突き付けている、白水沙姫だった。

転校生の正体

突然すぎて声が出ない。
自宅に入ろうとしたら、いきなりナイフを突きつけられる。これで動揺しない奴なんかいないだろう。
白水沙姫が手にしているナイフは炎のように赤い。しかも、うっすら光っているようにも見える。
「動いたら刺すわよ」
白水沙姫は本気のようだ。さっきまでとは目付きが違う。
このままじゃ殺られる。どうしたら良い？
…こうなりゃ一か八かだ！
俺は強行突破を試みた。何故そうしたかは分からない。直感ってやつか？
白水沙姫は俺の行動に戸惑ったのか、一瞬ナイフを引っ込める。だが、すぐに落ち着きを取り戻し、ナイフを振り上げ、斬りかかってきた。
俺はそれを間一髪でかわす。
なんとか逃げ出すことに成功した俺は、ニュータウンの北にある中学校に向かって走る。確か、中学校の下には去年の１１月に　新しく交番が設置されたはずだ！

約４００メートル程走り、交差点が見えてきた。交差点の右にはコンビニ、左には交番がある。青信号の横断歩道を渡り、交番に駆け込む。
交番には若い警察官がいた。若い警察官は驚きながらも、「何があったの？」と聞いてくる。俺は息を切らしながらも、
「ナイフを持った奴に…追われてるんです」
そう伝えた。
若い警察官は机の上に置かれたペットボトルを差し出した。ラベ

ルにはには「山の天然水」と書かれていた。どうやら飲ませてくれるようだ。俺はありがたくその水を飲んだ。
そして、若い警察官から事情聴取される。
「つまり、一緒にいたクラスメートの女子が突然ナイフを突き付けてきたってことかい？」
「はい、その女子の名前は…」
白水沙姫、と言おうとしたそのとき、

ドオォォン！！

後ろから、爆発音と、凄まじい風。
後ろを見ると、窓ガラスが割れている。さらに、外に出てみると、コンビニに停められた車も何台か、窓ガラスが割れていた。そして、道路の真ん中が黒く焦げている。
（何かが爆発したのか…？それじゃ、あの風は爆風…？）
俺は若い警察官と共に焦げている場所に近寄った。その直後、

ドオォォン！！

再び、後ろから爆発音と爆風。
振り向いた俺と若い警察官は、絶句した。
さっきまであった交番が燃え落ちていたのだ。その横に停めてあったパトカーは炎を上げ、激しく燃え盛っている。
コンビニの客らしき人々が悲鳴を上げる。
ここにいては危険だ。
そう思った俺は、気付けば走っていた。後ろから若い警察官が何かを叫んでいたが、聞いている暇はない。
交番から西にある交差点まで来た。
ここは片側一車線の国道と、片側二車線の市道が交わる交差点だ。

ガソリンスタンドやホームセンターが近くにある。
時間は午後6時前。辺りも暗くなってきた。　それにしてもさっきの爆発は何だったんだ。何もないところから突然爆発が起こるなんて。訳が分からない。
何が起きてんだよ
得体の知れない恐怖が俺を包む。
俺はガソリンスタンドの隣にある駐車場に目を遣った。乗用車と大型トラックが数台停められている。
と、その時、

その駐車場に、巨大な火の玉が落ちてきた！
火の玉は停められていたトラックに直撃、爆発し、炎上した。爆音と爆風が辺りを襲う。
俺は火の玉が飛んできた方向をを見上げる。
そこには信じられない光景があった。

そこには白水沙姫がいた。背中にコウモリの羽を生やし、宙に浮いた、異形な姿の白水沙姫が。その手には、あの赤いナイフが握られている。　「逃げられると思った？人間ごときが私から」

ん…？
赤いナイフの先端で何かが光っている。
それはみるみるうちに大きくなり、巨大な火の玉になった。
白水沙姫はナイフを持った腕を振った。それと同時に、巨大な火の玉が打ち出された。
火の玉は市道を走っている車の目の前に落ちた。落下地点で激しい爆発が巻き起こる。
目の前に火の玉を落とされた車は急ブレーキをかけて後続車から追突されたり、殆ど減速せずに急ハンドルを切って横転した。対抗車線を走るトラックが爆風に煽られて横転し、コントロールを失っ

た車が次々と事故を起こす。
車や近くの民家や商店、ガソリンスタンドなどから人が飛び出し、蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う。
…バケモノだ。アイツは。
背中にコウモリの羽を生やし、空を飛び、爆発する火の玉を打ち出す。バケモノ以外の何者でもない。
白水沙姫は再び火の玉を打ち出す準備をしている。俺は、それを見ていることしかできなかった。
白水沙姫は火の玉を打ち出した。
火の玉が交差点のど真ん中で炸裂した。乗り捨てられた車が横転する。
交差点の角で爆発を見ていた俺の後ろに、白水沙姫がスタッと着地する。
「楠原君がさっき逃げなければ、こんな事せずに済んだのにね」
「お前…何者だ。人間じゃねえだろ、少なくとも」　翼が生えてる人間なんて聞いたことが無い。
「まぁ、流石に分かるとは思うけどね。確かに私は人間じゃないよ」
白水沙姫は不敵に笑った。
「私は、悪魔よ」
悪魔？ゲームとかに出てくる、あの悪魔？いまいち信じられないが…
あんな技を見せられたんじゃ、信じるしかないんだろうな。

遠くからパトカーのサイレンの聞こえてきた。それも何台も。これだけの騒ぎだ、誰かが通報したんだろう。
すると、白水沙姫は再び火の玉を構え、打ち出した。
火の玉は乗り捨てられた車に直撃し、爆発。それが周りの車に次々と引火し、市道も国道も燃え盛る車で塞がれた。
「これで、警察は簡単には近付けない」
白水沙姫は冷たい笑みを浮かべた。

その目は、獲物を捉えた猛獣のような目だ。
完全に、逃げ道を塞がれた。
目の前は白水沙姫に、後ろの道は炎上する自動車に阻まれ、動けない。
「それじゃあ、楠原君には死んでもらおうか」
白水沙姫が俺に向かって、ゆっくりと歩を進める。
「な…何が目的なんだ、お前は」
俺の足が震える。その震える足で後ずさる。
「知らなくても良いじゃない、どうせ死ぬんなら」
白水沙姫が近づいてくる。俺は後ずさる。
しかし、それは無駄だった。
元々退路を塞がれたこの状況では、ただの時間稼ぎにしかならないのだ。
やがて白水沙姫が俺の目の前に立ち塞がる。「安心して、殺すといっても、楠原君は私の中で生きられるから」
意味深な一言に、
「どういう意味だ…！」
俺は白水沙姫を睨み付ける。
白水沙姫は答えない。ただ、俺を見つめてくる。
ん…あれ…？
頭がぼんやりしてきた。思考が止まる。白水沙姫の目が怪しく光っているようにも見える。だが、何も考えられない。
思考力が働かない。
「さよなら」
そう、白水沙姫が呟いた。
その時、

ドンッ

気が付けば、俺は、

白水沙姫を突き飛ばしていた。
白水沙姫は尻餅をつく。
俺は一目散に走った。俺には何となく分かる。もし、今逃げなければ確実に殺される！
白水沙姫は追いかけてこない。それどころか、信じられないと言いたそうな顔をしている。
チャンスだ！俺は必死に駆ける。
そんな俺の横で、

ドカァァン！！

爆発が起きた。
車が爆発したのだ。
俺は吹っ飛ばされ、

頭から、地面に落ちた。

痛てぇ。とにかく痛てぇ。俺の意識がどんどん遠のいていく。
早く…逃げなければ…殺される…！
最後の力を振り絞って逃げようとする。
しかし、非情にも、俺の意識はそこで途絶えてしまった。

俺は、死んだのか？
きっとそうだろうな。おそらく俺は意識が途絶えた後、白水沙姫に殺された。だから、今俺はあの世にいるのだ。それにしても、あの世ってこんなに暗いものだったのか。もっと明るいものだと思ってたぜ。
と、思っていたら

突然、視界に光が溢れた。

「ここは…！」

目の前に広がる光景。

…それは俺の家の、リビングだ。俺はソファーに寝かされ、毛布までかけてある。

どういう事だ？俺は死んだんじゃ…？

体を起こし、辺りを見渡す。間違いない。ここは俺の家だ。誰かが運んでくれたのか…？

それに、俺は何故殺されなかったんだ…？

「あっ…」

後ろから、声。

俺は振り向き、その声の主の姿を見て、身構える。

その声の主は、白水沙姫。さっき、俺を殺そうとした女。

「…」

白水沙姫は黙ったまま、突っ立っている。あのコウモリのような翼は、今はない。

俺は警戒を解かない。こいつは何をしてくるか分からない。

「…なんだよ」

白水沙姫を睨み付ける。

「…ごめんなさい」

その一言に、俺は耳を疑った。

「さっき、私は貴方を殺そうとした。けど…、貴方は、殺せない。いや、殺してはいけない」

何を言っているんだ？

「貴方は、私達の…、救世主、だから」

な…何が言いたいんだ？俺が、救世主？

「だから、その…ご、ごめんな…さ…い…」

絞り出すような白水沙姫の言葉。その表情は今にも泣き出しそう

だ。
「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめ…ひっ…ごめんな…さい…ふぇっ…ひくっひくっ…うわーん！！」
とうとう、泣き出してしまった。これは嘘泣きなんかじゃない。本気で泣いているようだ。
俺はいたたまれなくなって、
「わかったから、泣くな」
「ぐすっ…ひくっ…」
白水沙姫を慰めてやった。俺って優しすぎるのかな？
だって、さっき俺を殺そうとした奴を慰めてるんだからな。
「ひくっひくっ…ごめんなさい…」
「分かったから、もう謝るな」
「ぐすっ…許して…くれるの…？」
「許すも何も、そうやって女に泣いて謝られたら、許してやるしかねぇだろ」
なんというか、女の泣き顔って、妙にそそられるんだよな。
「あ…ありがと…」
ようやく泣き止んだか。とりあえず一安心だな。
だが、気になることがある。俺が救世主とはどういう事だ？
俺はそれとなく聞いてみる。
「まず、私達のことから話さないといけないわね」
白水沙姫は真剣な顔になった。

「私はさっき、自分の事を悪魔って言ったわ。だけど、悪魔っていうのはあくまで悪魔の総称にすぎないのよ」
つまり、悪魔とは悪魔全般の総称で、幾つかの種類に分かれているのか。あくまで悪魔の、何て言い回しじゃ分かりづらいだろ。
「私は夢魔（むま）っていう種類なの」
「それってどういう奴なんだ？」
「２つの種類がいるわ。１つは寝ている生物の夢の中に入り込み、

悪夢を見せて苦しめるもの。ナイトメア、といえば解るかしら」
　なるほど。
「もう１つは、同じく夢の中に入り込むものだけど、入り込むのは男が見てる夢だけで、悪夢ではなく、淫夢を見せるもの。私は後者に当てはまるわ」
　淫夢…？そんなもの見せてどうするんだ？
「淫夢を見せて相手の性欲を高めて、そこで精液を頂くの。こっちはサキュバスって言えば解るかもね」
　ああ。
　そう言えば昔、俊哉が言ってたな。それっぽいことを。
「悪魔は他にも多くの種類がいるわ。吸血鬼や死神、魔女、付喪神…」
「ちょっと待て」
　今の説明に疑問が生じた。
「吸血鬼や死神はともかく、付喪神は妖怪だろ」
　付喪神は妖怪だ。悪魔ではないだろう。
「妖怪っていうのは悪魔の日本での呼び方。地域によって呼び方は変わるのよ」
　そう言うことか。
「悪魔は普段、魔界っていうところで暮らしているの。でも今は、そうじゃない。第二次魔界戦争が始まってしまったから」
「第二次魔界戦争？」
「第二次魔界戦争は、人間界を魔界に取り込もうとする勢力と、それに反対する勢力との戦争。それがどんどん拡大して、今では魔界全体を巻き込んだ争いになってしまった。それどころか」
　白水沙姫は俺の目を真っ直ぐに見て、
「人間界すら、戦場になろうとしている」
「ちょっと待て。それってつまり…」
「そう、人間界でも悪魔同士の争いが起こる。もしそうなったら、多くの人間が命を落とすことになるわ」

おいおい。なんだかかなりヤバイことになってんじゃねえか。
「で、俺が救世主っていうのは何故なんだ」
そこだ。俺は平凡な高校生。救世主って呼ばれるいわれはない。
「それは、貴方に私の催眠が効かなかったからよ」
「催眠？」
「私は相手を見つめることで、見つめた相手の脳をトランス状態にできる。そしてそれは、人間には防御できないのよ」
そう言えば交差点で白水沙姫に見つめられて、思考がストップしたな。
あれ？でも俺はそのとき抵抗できたぞ？
「今から９００年前に起きた第一次魔界戦争のとき、一人の人間が夢魔と手を組んで、戦争を終結させたわ。その人間は魔界では英雄扱いされていて、その人間もまた、夢魔の催眠が効かなかったのよ」
「…！」
まさか、俺が救世主って呼ばれる理由って…！
「気付いたみたいね。そう、貴方にも催眠が効かなかった、魔界の英雄になった人間みたいにね」「だ、だけど俺は普通の高校生だ。魔界の戦争を終結させるなんてできるわけ無い」
「いえ、できるわ。催眠が効かなかったのがその証拠よ」
何故だ、何故俺なんだ？俺なんかより強い人間なんていくらでもいる。なのに、何故？
「催眠が効かないってことはね」
白水沙姫は俺を真っ直ぐ見て言った
「それだけ高い魔力を持っているってことなの。楠原君の場合はそれに気づいてないだけ。潜在的魔力はかなりあるはずよ」
思考がついていかない。
俺は、高い魔力を持っている？それに気づいてないだけ？
「そうね、私の見込みだと…、多分、『フレイム・ボム』を１０発くらい放てるわね、休憩なしで」
「『フレイム・ボム』？…もしかして、あの火の玉の事か？」

白水沙姫は頷く。あの火の玉、名前あったのか。
「それだけの魔力を持つ人間なんて、まずいないわ。お願い、力を貸して。このままでは魔界だけではなく、人間界も滅茶苦茶になるわ」
白水沙姫が深々と頭を下げた。だが、
「悪い…、俺には無理だよ。もう一度言うが、俺は普通の高校生だ。魔界だの、潜在的魔力だの、魔界戦争だの言われても、俺みたいなただの高校生がどうにかできるとは思えない。だから、無理だよ」
悪いな…白水。
俺には無理だ…。

「どうしても、ダメ…？」

うっ。
待て、それは…、
反則だろ。
上目遣いで、目を潤ませて、そんな可愛い声出して。
「それなら…！」
次の瞬間、白水沙姫は、
体を俺に這わせてきた！

「こういうこと、してあげるよ…？」
ま、まさか、色仕掛けで落とす気か？
「まっ…待て！落ち着け！」
「毎日だって、してあげるよ…？」
まずい。まずいぞ。女子との関わりが少ない（友里を除く）俺にとっちゃ、このシチュエーションはまずい！こんな美少女に迫られるなんて、普通の男なら狂喜乱舞しそうだけど！

むにっ

俺は一気に顔が熱くなるのを感じた。

白水沙姫のＤかＥの豊かな胸が…、

俺の股間に当たっている！

俺にとっちゃ刺激が強すぎる。もし龍介だったらあまりの興奮で気絶するだろうな。

（って、そんなこと考えてる場合か！）

俺は白水沙姫を押し退けようとする。

だが、その前に密着されてしまった。

「お、おい、離せ！」

必死にもがき、白水沙姫を引き離そうとする。

ガチャ

ガチャ…？

音をした方を見ると、そこには、

今日は帰ってこないはずの、姉ちゃんがいた。リビングの入口で扉を開けたまま、固まっている。

…

…

「…あはははは…、ごめんね、邪魔しちゃって…」

姉ちゃんはばつが悪そうに言って、後ずさっていく。

「ち、違う！誤解だ、姉ちゃん！」

白水沙姫をはね飛ばし、姉ちゃんに事情を説明する。

「ふーん、そういうことをしてたわけじゃないのね」
姉ちゃんは完全ではないが、一応納得してくれた。
ただし、白水沙姫が夢魔ということは伏せてある。言ったって信じてくれないだろうしな。
「ま、いいわ。それより聞いてよ、彼氏ったらさー」　…それから、愚痴を30分くらい聞かされた。要約すると、彼氏にカフェに呼ばれ、デートだと思っていたら、別れ話を切り出されたんだとか。その後、憂さ晴らしに一人焼肉をしてたんだそう。
「あんたらは、別れたりしないように気を付けなよ、周が彼女を連れてくるなんて初めてなんだし」
それじゃ、おやすみー、と姉ちゃんは寝床についた。
…ぼそりと「リア充死ね」と言ったような気がするが、多分気のせいだ。

姉ちゃんに続いて、白水沙姫も寝床についた。ていうか、泊まる気かよ。
ただ、寝る前にアイツはこう言った。
「とりあえず、貴方はどうしたいか、考えておいて」
あの一言が気になる。
魔界戦争がこのまま進むと、人間界にも被害が出る。だが、俺なら食い止められるかもしれない。白水沙姫はそう言っていた。だが…
正直、怖い。
巻き込まれたが最後、バケモノ達と戦わなくてはならなくなるだろう。白水沙姫は『フレイム・ボム』とかいう爆発する火の玉を使う。きっとそういう人間離れした技を使うバケモノ達と戦わなくてはならなくなる。命の保障は、ない。
だが、誰かが魔界戦争を食い止めなければ、多くの人々が死ぬのだ。どちらを選んでも自分にはプラスにならない。どうするべきか…。
…。

…。

辺りを灼熱の炎が包む。遠くに見える街並みが、崩れ去る。俺が立っている道路には、何人もの人が倒れている。全員、体の下には赤い染み。死んでいるのだ。血を流して。

目の前に異形の生物が着地する。ＲＰＧなんかに出てくる敵キャラのような見た目だ。

その生物は、近くの民家に入っていく。

きゃあ、うわぁ、といった悲鳴が中から聞こえてくる。

次の瞬間。

家の中から女性が吹っ飛んできた。女性は電信柱に直撃した後地面に落下し、ピクリとも動かなくなった。

更に、民家から男性が這い出るように出てきた。その後ろにはあの、異形の生物。異形の生物は鋭い爪を持つ腕を振り上げ―

ザシュッ！！

男性を、切り裂いた。血飛沫が飛び散り、辺りを赤く染める。

…もしかして、

これが、魔界戦争が人間界に拡大したときの光景なのだろうか？

だとしたら…

人間は、太刀打ち出来ない。ただ、滅びるしかない。

誰が、止める？

誰が、倒す？

誰が、救う？

ダレが、ダレが…

「夢…か…」
目の前に映る、リビングの光景。
どうやらいつの間にか眠ってしまったらしい。
「あ、起きた？」
後ろから、白水沙姫が現れる。
「白水…さっき、夢を見たんだ。バケモノ達が街を襲い、多くの人が死に絶える、夢をな」
俺が見た夢を、白水沙姫に説明する。
「それは、もし魔界戦争がこのまま拡大したときの、光景よ。どうして見えたのかしら…？まあ、いいわ」
白水沙姫は俺を真っ直ぐ見て、
「貴方には選択の自由がある。だから、断っても構わないわ。だから、今ここで答えてほしいの。私達と組んで魔界戦争を食い止め、人間界を救うか否かを」
決断を迫った。
「俺は…」
次の一言が、俺の運命を左右する。後戻りは出来ない。
バケモノと戦うなんて冗談じゃない。たかだか高校生の俺が、魔界なんてとんでもない世界の戦争を止めろ、なんてできるわけがない。あの『フレイム・ボム』とかいう技に匹敵するような力だって持ってない。結論から言えば、首を縦に振る訳がない。　だが…、
この世界を、この街を、あの夢の様に地獄絵図にされるくらいなら…、

「魔界戦争を、止める」
首を縦に振ってやるよ。
「本当に…手を貸してくれるの…？」
白水沙姫は目を潤ませた。
「ああ、だ…」

「ありがとー！！！」
すごい勢いで抱きつかれた。い、痛い。
「でも、どうして？昨日は無理って言ってたのに」
「あの夢を見たっていうのもあるけど…、父さんの実家に伝わる格言が頭に浮かんだんだ」
父さんの実家。
九州で有名な剣道教室で、実家の道場以外にも、九州各地に道場を持つ。何でも、楠原家の古いご先祖様はある高名な武将に仕えており、非常に信頼されていたらしい。
侍の時代が終わりを告げた明治時代に剣道教室を開き、現在に至ると、じいちゃんから聞いている。　そこに伝わる言葉が、俺の決断を後押しした。
「刀は斬るものではなく、守るもの。使い手もまた、刀と同じく何かを守るべし。そして、それに誇りを持て」使い手もまた、刀と同じく何かを守るべし。そして、それに誇りを持て」
だから、俺は守ることにした。
人間を。
人間界を。
「本当は、怖いんだけどな」
そう、正直、怖い。
「だから、しっかりサポートしてくれ、白水」
白水沙姫はその言葉に、
「うん！」
満面の笑顔で、向けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4270z/

ヒューマン&モンスター

2011年12月18日07時56分発行